

肖像

— 紙形と古写真 —

プロジェクト研究の成果から



はじめに

1997(平成9)年に開設された東京大学史料編纂所附属画像史料解析センターは、2007年をもって開設10周年を迎えました。史料編纂所では、これを記念し、下記の要領にて研究集会を開催します。

このパンフレットでは、研究集会における報告の内容の一端を示すべく、この10年間に、肖像画プロジェクトの研究に関わって本所の所蔵品に加えることのできた紙形(肖像画稿)2点、および古写真研究プロジェクトが調査を行った所外の古写真のいくつかについて、研究の成果とあわせて紹介します。

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設10周年記念研究集会

画像史料研究の成果と課題

日時 2007年6月29日(金) 午後1時～5時

会場 東京大学山上会館2階大会議室

内容

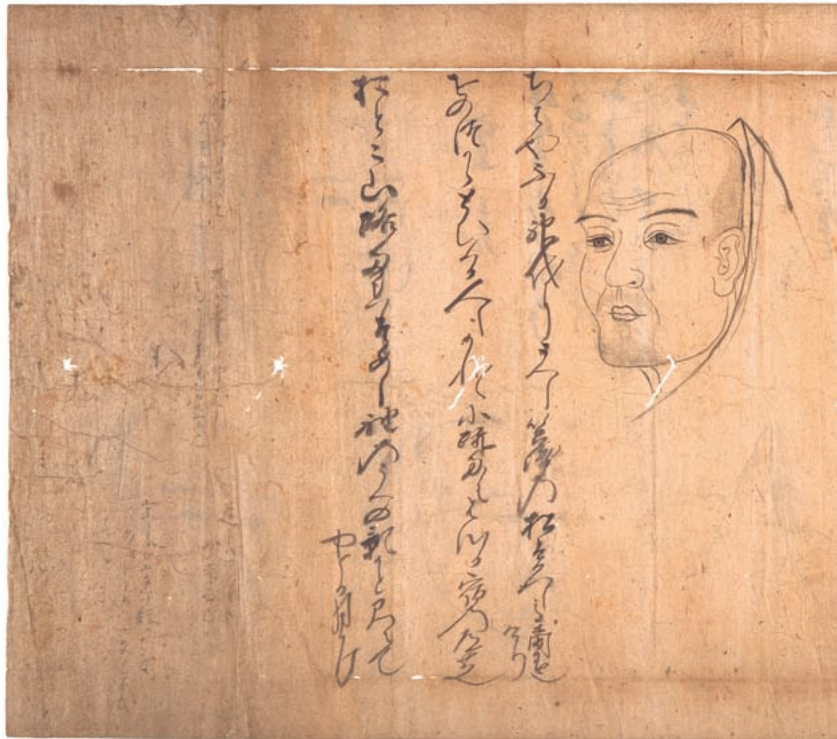
- **ご挨拶** 横山伊徳(史料編纂所長)
- **講演** 黒田日出男氏(立正大学教授、元画像史料解析センター長)
「洛中洛外図の新出本と林原本」
- **講演** 青山宏夫氏(国立歴史民俗博物館准教授、画像史料解析センター客員教員)
「古地図研究の方法と課題」
- **特別講演** 王 勇氏(中華人民共和国・浙江工商大学日本文化研究所長)
「倭寇図巻と抗倭図巻」
- **報告** 画像史料解析センターにおけるプロジェクト研究
 - ①古写真プロジェクト(保谷 徹, 谷 昭佳)
 - ②荘園絵図プロジェクト(石上英一, 西田友広)
 - ③肖像画プロジェクト・一遍聖絵プロジェクト(藤原重雄)
 - ④近世儀礼プロジェクト(小宮木代良)
 - ⑤花押彙纂プロジェクト・崩し字プロジェクト(林 譲, 井上 聡)
- **報告** 画像史料解析センターの成果と課題(画像史料解析センター長 林 譲)
- **全体討論**

(表紙) 三条西実隆像紙形 文亀元(1501)年10月 土佐光信筆 東京大学史料編纂所蔵 41.2×25.8

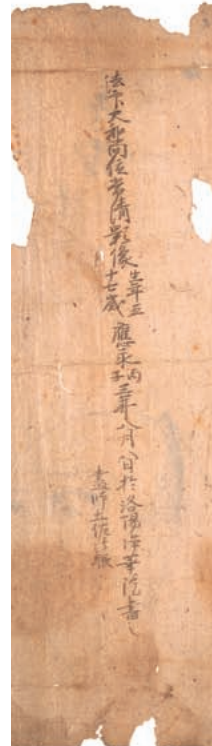
(裏表紙) 小沢肖像写真 万延元(1860)年7月 中濱万次郎撮影 江川文庫所蔵 8.4×7.1

紙形（肖像画稿）

■石清水八幡宮歴代社務影紙形 —東京大学史料編纂所蔵—



第1紙（裏，部分）



第2紙（裏，部分）

紙形とは、仏画などの下絵・手本(粉本)あるいは指示書をいい、対象を忠実に写したものとして本格的な着彩画の制作に際し規範力を持ったが、室町時代には肖像画の画稿・デッサンとしての意味も定着していた。

表紙に掲げた「三条西実隆像紙形」は後者の代表的な遺品で、左下の注記「辛酉 十四」に相当する『実隆公記』文亀元年（1501）10月4日条から、土佐光信に描かせた「愚拙肖像紙形」とわかる。実隆は「十分に似ず、比興なり」との感想も記しており、肖像の肖似性（像主－絵師－注文主の間でのイメージ形成）について省察する手がかりともなろう。淡墨で当たりをつけ、細線を継ぎながら顔の形を作ってゆく様子がよく伝わる（第一紙形）。同じ土佐光信筆とされる紙形に国立公文書館蔵「蜷川親元像紙形」もあるが、こちらはデッサンから清書した段階のもの（第二紙形）と考えられる。いずれも像主・注文主周辺の記録類に挟みこまれて伝来し、偶然発見された点でも興味深い。2001年購入。

「石清水八幡宮歴代社務影紙形」は、平安時代から室町時代の田中家代々の11人（13面）の面貌を描く。先行する図様を写し集めた列影図・図像集としての性格が基本で、画賛についての注記もある。しかし、第2紙左上の画像には形を整えてゆく過程が残っており、「奏清三十九才寿像也、延徳四（1492）卯三日書之」はこの像にかかるものであろう。おそらくは奏清像の制作に関わって、歴代像が写されたものと考えられる。光清から行清の間の四人について画像はないが、面貌の特徴などが第一紙裏面に淡墨細字で記されている。また常清像の裏書には、応永3年（1396）画師土佐法眼と見える点も注目される。2003年購入。

対象となる人物を面前に描いたデッサンとしての紙形は、1500年前後の遺品となると、他に東寺観智院傳來「宗宝・宗杲像画稿」（現在所在不明）のうちの一図をあげうるくらいで、この両図が画像史料解析センターの研究活動と関わって本所所蔵となったことは意義深い。（藤原重雄）

行清

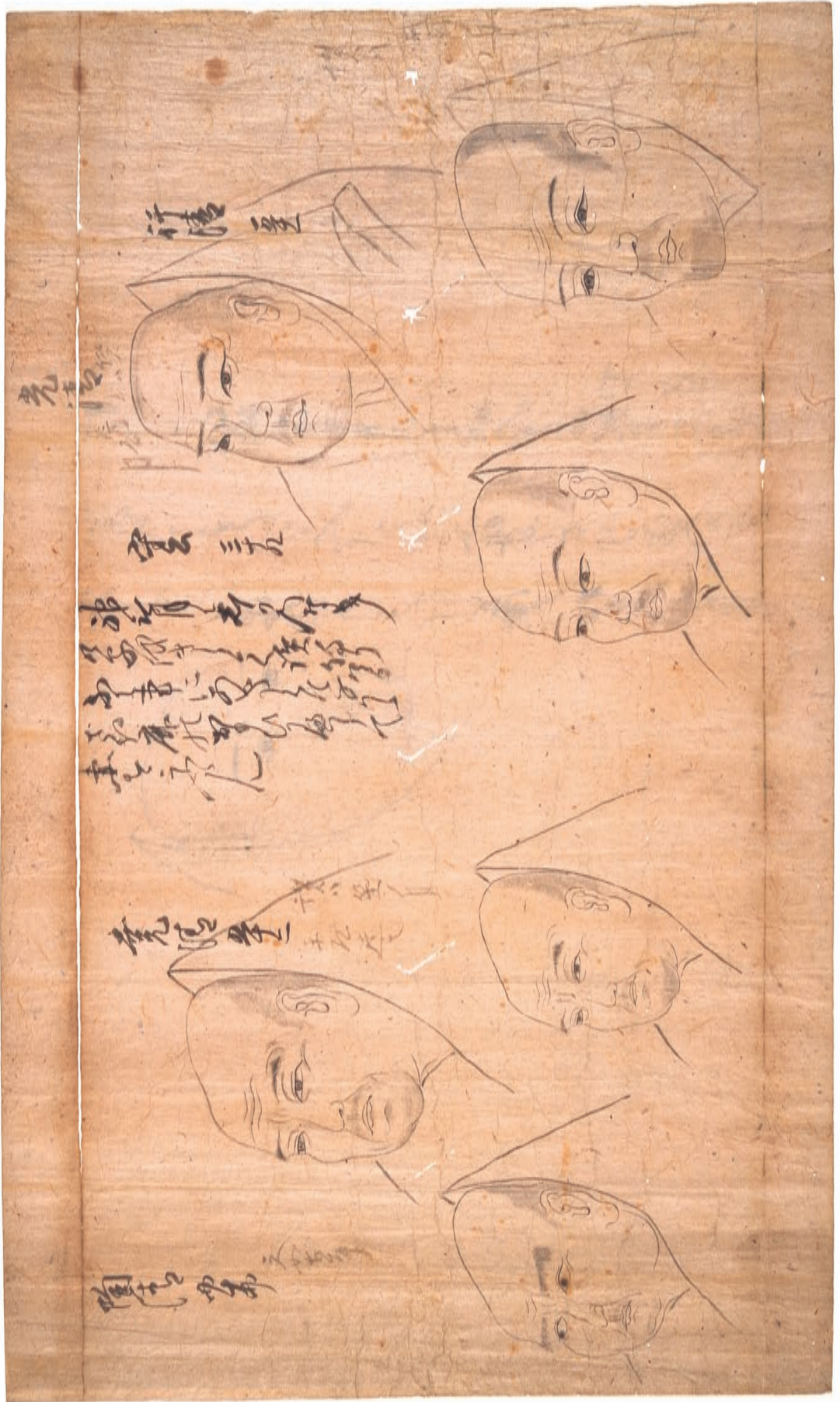
光清

守清

行清
裏面

堯清
堯清

陶清



(定清)

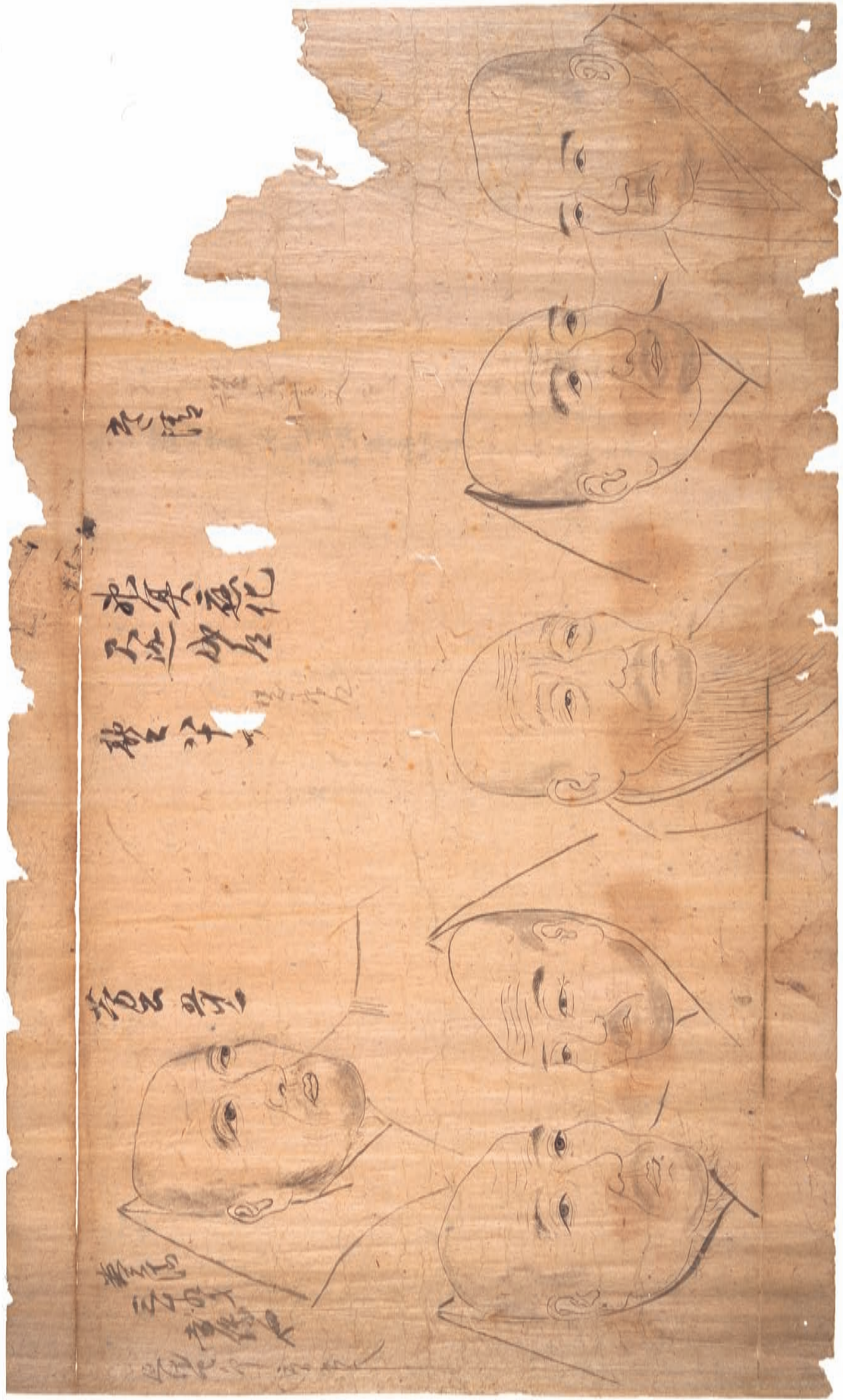
常清
裏書

融清

芳清

奏清

(生清)



石清水八幡宮歷代社務影紙形 第一紙(表) 三・〇×五・三

古写真

■中濱(ジョン)万次郎撮影アンブロタイプ写真 一江川文庫所蔵古写真資料一



貞道肖像写真（文久元年6月撮影） 6.1×5.0



小沢肖像写真裏面（黒樹脂塗布痕）

江川文庫所蔵のアンブロタイプ写真のうち数点は、中濱万次郎が咸臨丸でサンフランシスコから持ち帰った写真機により撮影したものと推察できる。また、外国奉行柴田日向守旧蔵（個人蔵）の名刺写真は、文久2年（1862）に遣欧使節団として訪問したオランダ・ハーグで撮影されたものである。古写真研究プロジェクトでは、これら国内外に点在する幕末・明治期の肖像写真を中心とする古写真に関する画像を収集し、歴史学と写真史の両面から調査研究を行っている。

裏表紙に掲げた小沢肖像写真が制作されたとされる万延元年（1860）7月の江川家江戸邸の動きを記した「御出府日記」には、万次郎が同邸内で来客を相手に写真撮影を行ったことが見えている。例えば、同29日、講武所頭取松平仲以下数名が、写真撮影をしてもらうため江川邸を訪れており、アメリカから帰国間もない万次郎が、住居のあった同邸内で頻繁に写真撮影を行っていたことがわかる。また、小沢肖像写真に見える技法は、万次郎の長男・中濱東一郎氏が伝える「万次郎は黒布を用いず黒い樹脂をガラスに塗布することにより鮮明な肖像写真を製作していた、これは当時一般に欧米で行われていた方法である」とする特徴と一致している。収集した画像史料と文書史料により、江戸における実質的な写真活動の始まりは、万延元年に江川邸内で中濱万次郎の手によるものであったことが明らかとなった。

柴田日向守旧蔵の名刺写真には、日本における黎明期の写真研究に関わった人物が、写される側として写真体験したことを示す興味深い写真が含まれている。佐賀藩医の川崎道民は、湿板写真法により鍋島直正・大槻磐溪などの肖像写真を製作した人物である。松木弘安は、薩摩藩の島津斉彬らの写真研究に関わった人物であり、森山栄之助は本所所蔵の島津家文書中に伝わる写真技法書「写真鏡小説第二編」の訳者である。

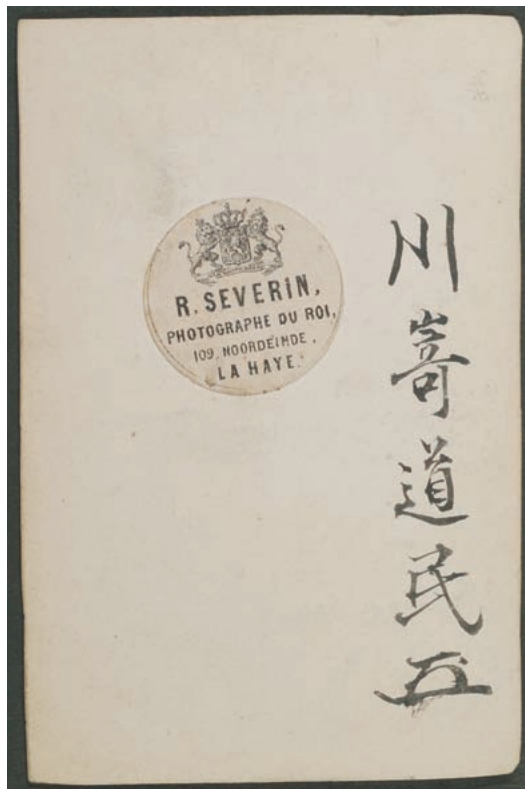
（谷 昭佳）

■ オランダで写された写真研究の先駆者たち

—外国奉行柴田日向守旧蔵名刺写真—



川崎道民肖像写真 9.7×6.4



川崎道民肖像写真（裏）



松木弘安肖像写真 9.7×6.4



森山榮之助肖像写真 9.7×6.4



東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター開設10周年
記念研究集会「画像史料研究の成果と課題」パンフレット
肖像 一紙形と古写真一 プロジェクト研究の成果から

2007(平成19)年6月25日発行(非売品)

発行 東京大学史料編纂所 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

印刷 ヨシダ印刷株式会社